

秋姉妹の為に世界十一ヶ国と地域の
全五十四サークルが今一つになる。

爽秋

「双秋見初めば」

秋姉妹合同企画



イラスト：晴音(TOKINE)

爽秋

〜双秋見初めば〜

Aki Sisters Anthology Project ∼ Sôshû — Coming Across Autumns —

秋姉妹合作計劃「爽秋〜自從遇見雙秋〜」

아키 자매 합동 기획 "산들가을 ~가을 들과 만남으로~"



街角麻婆豆

Machikado-Mapoze

마치카도 마보즈







豊穰神という言葉がある。その名の通り、五穀豊穰を司る大地の神様のことだ。ギリシヤ神話におけるビーナスやアルテミス、またメソポタミアにおいてはイシエタル、北欧神話においてはフレイヤ、大和ではイザナミや稲田姫などが代表的な神様である。

ちなみに最近では、狼の耳と尻尾を持った麦の神様なども一部で熱烈な信仰を集めているらしいが、それはまあさておくとして。

それぞれ性格も行動理念も異なる神様達だが、そんな中でたった一つだけ。実はこれら豊穰神にはある『一つ』の共通点があったりするのだ、これが。

【豊穰神の憂鬱／大平原の小さな胸】

さてさて、所変わってここ幻想郷にも豊穰の神様は当然存在している。

気さくな性格と可愛らしい容姿で里の人間たちにも知られている、穰子・静葉の秋姉妹のお二人だ。

「さあ静葉、いよいよ今年も収穫の時期がやってきたわ。張り切っていくわよー！」
暦も長月の終わりに差し掛かり、いよいよ自分たちの季節がやってきたとばかりに穰子のテンションは鰻のぼりの如く高まっていた。

「おーっ。じゃあいつものように山は私が担当するから、里は穰子をお願いね」

ノリ良く細い腕を突き上げて微笑む静葉。

流石にお姉ちゃんなだけあってか妹の穰子よりは多少落ち着いてるものの、しっかりと浮かれて小踊りしている辺り、似た者姉妹と呼ばれる訳である。

「去年は速さ勝負だったけど、今年は新嘗祭（※収穫祭の事）のお供えの量で勝負よっ！」

ビシッと指を突きつけて宣戦布告とばかりに宣言する穰子。

「ふふーん、今年もお姉ちゃんの力を見せてあげるわよ穰子。芋を洗って待ってなさいっ」

「冗談ボイよ。今年こそ静葉には、紅葉饅頭どっさり作らせてやるから！」

向かい合い、良く分からない煽り文句と共に戦いの火蓋が切って落とされる。

毎年毎年、秋が来る度にこうして互いが司る神としての力を自慢し、比べて勝負しあう二人にとってこれは大事な儀式でもあるのだ。

単に子供っぽいだけじゃないのん？ とか突っ込むの禁止。

そうして静葉と別れて穰子は一人で里を回っていく。

「はいいごめんね。ちよつと通るよ……んしょつと」

勝手知ったる他人の家とばかりに、刈入れ前の田畑へずんずん入っていく穰子。

これが普通の子供ならば『なに勝手に田畑さ入ってるだ！』などと怒鳴られ即刻

つまみ出される所だが、周囲の人間は誰一人として穰子を咎めたりはしない。

それどころか手を合わせて拝む爺さん婆さん達に手を振った後、田んぼのど真ん中に立つと穰子は目を閉じて両手を胸の前で合わせる。

穰子の神力の使い方は至って簡単。作物が立派に成長した姿を思い浮かべながら

『大きくなーれ、大きくなーれ』と祈るだけ。

しかし十〜十五年に一度来る大凶作の時を除けば、穰子の力で豊作にならない年

はない。

ちなみに静葉は紅葉を司る神様なので、穰子ほど豊穰神としての側面は強くない。だが果物や木の実といった山が装う過程で生まれる副産物や、季節が秋へと進む

上での樹木の成長などはゼーんぶ静葉のおかげだ。

そんな訳で柚人^{ゆずり}や山間の里の間では穰子以上に絶大な信仰がある。

「穰子さま……ありがたやありがたや」

「今年も穰子さまがいらっしやった。これで何も心配いらん」

「いや、そんな拝まれると照れるんだけどね？ これでここは大丈夫よ。回る所は

一杯あるからね、次に行くぞ次々！」

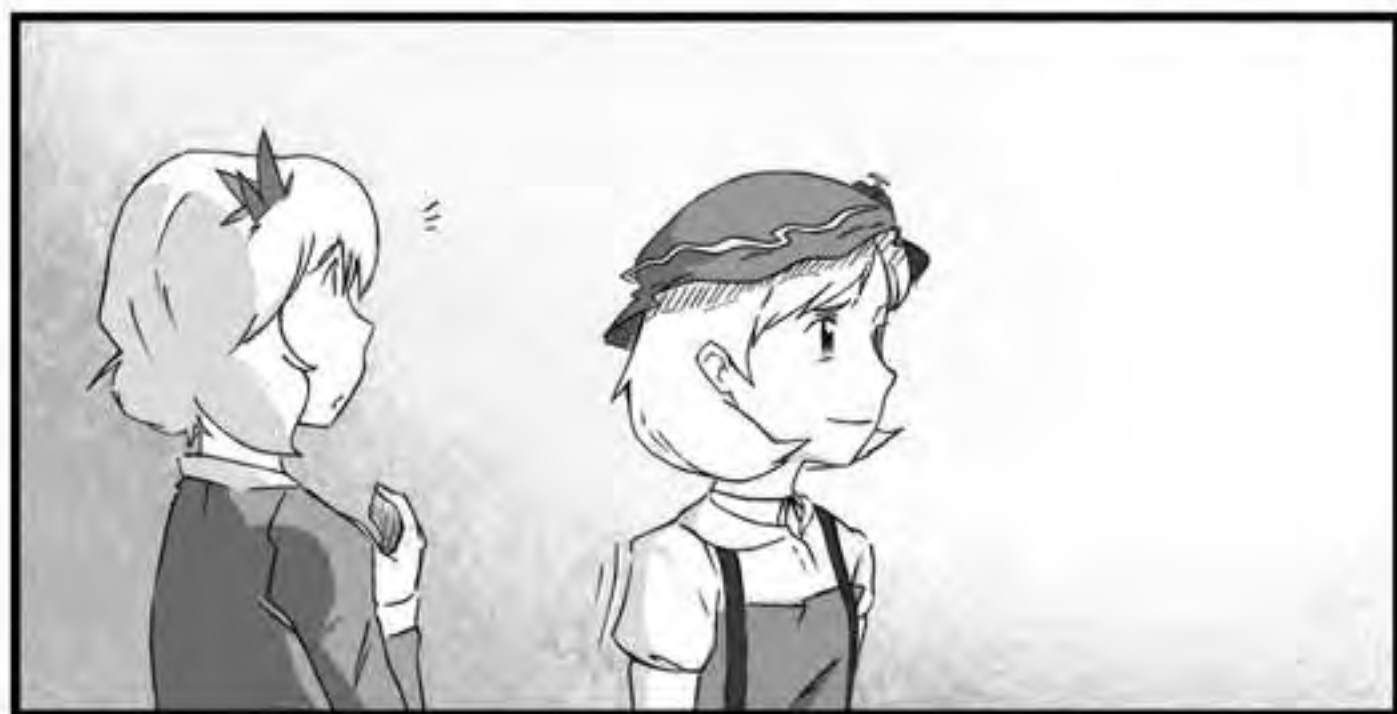
里の面々からしても本来ならば日頃からの感謝を込めて目一杯もてなしたい所なのだが、何しろこの時期の穰子や静葉は幻想郷の山や里を巡って大忙し。

引き止めて回りきれない所が出た日には洒落にならないので誰も引き止めない。

その代わりに新嘗祭で、二人をお呼びして盛大に祀るのだ。

神様の格は力の強さではなく、信仰の深さで決まる。

その点で秋穰子は間違いなく麓のどの神様よりも高い信仰を一身に浴びていた。



The Sisters of Autumn

Presented by wrathie

[... Grandma... why do you like Autumn?]

A little girl, fresh from the city asked her grandmother, who was sitting calmly looking outside at the scenery.

It was, as the little girl said, autumn. The fields were colored with red and gold, tell-tale signs of autumn and although it was still warm, with each passing day the summer heat was slowly giving way to the cool autumn wind...

The little girl did not understand why her grandmother liked autumn; to the little girl autumn is not like any other season. It is not like spring, with its beautiful flowers and the lovely singing of the birds... nor like summer, where the days are long and the little girl can play in the grassy fields with her friends all day.

It is unlike winter, where it was so bitterly cold but as she played in the snow, it would make her feel warm inside, the warmth of her friends and the warmth of her family with her as they spent winter together in the kotatsu.

No, autumn is not like that - it is a time when the little girl would visit her grandmother and to stay with her while her parents go abroad for studies... a boring, boring time.

The little girl did not dislike her grandmother - she loved her - she loved every part of her. From the toothless smile, to the odd smell of sweet potatoes she has on her clothes and the way she sung that same old tune for her to sleep.

No, she liked her grandmother... but did not like autumn as it brought her away from her friends and what she liked.

The red and golden leaves, they were not at all fun to play with... they would crumble and break into tiny pieces as she ran over them.

She couldn't hide in them when playing hide and seek as creepy crawlies were hiding under them... no, autumn was not fun... the friends that she knew here were helping their parents with their preparations for winter or had to attend classes now that summer break was over...

She felt lonely...

So she asked her grandmother...

[Why, why do you like autumn? Is... there something special?]

[Why yes, Dear...]

Her grandmother smiled warmly as she turned to face her, the smile lingered on her face as she settled the little girl down on her lap. The old lady winced a little at the weight but she smiled as her favorite granddaughter turned and looked at her in anticipation.

上年之秋末



信仰は偽き神様の為に

データで見る秋姉妹人気の意外な事実

久樹 輝幸

スキマ妖怪曰く。幻想郷の自然には、他から干渉を受け付けない属性が三系統ある。日、月、星を以て気質を表す『三精』春夏秋冬を以て生命を表す『四季』そして木火土金水を以て物質を表す『五行』である。生命の輪廻を司る閻魔様の名前が『四季』であるのも、この事と当然無関係ではないだろう。

中でも秋は、燃え盛る夏の力の集大成、成果と衰退を表す。人にして妖怪にしる、生涯で最も完成された時期であり、その魅力たるや他の季節を圧倒すると言っても過言ではない。

秋静葉と穰子。彼女たちはその秋を司る、まこと靈驗あらたかな神様である。妹の穰子は豊かさとしる、姉の静葉は幽寂と終焉を象徴する。先に生まれた姉の方が、終わりに近いというのは何と無情な話だろうか。

ともあれ、これほどまでに神様として大成されているお方々、さぞかし絶大な信仰を集めているであろう……と思うと、実はあんまりだつたりするのは周知の通りである。東方キャラの人気の指標として著名なものに東方Wiki(※)が主催する「**東方シリーズ人気投票**」があるが、最新の結果で静葉が五十位、穰子が四十九位——涙無しには語れない順位である。その前の第五回など、紅魔郷以降の本編登場キャラの中で**最下位とブービー**という屈辱的な結果であった。

何故だ！ 何故なんだ！ 姉妹仲良く並んでいるのは見ていて微笑ましいが、姉妹合わせて三桁直前とは何事か。姉妹キャラ故のハンデ

イ？ いやあ吸血鬼姉妹とか覚姉妹とか何なんだよ!! やはり一面ボスは目立たない存在なのか？ 空気のようにそこら辺をふよふよ飛んでいれば十分なのか？ 神様としてそれは色々と拙くはないのか？

だがちよつと待つて欲しい。前言をひっくり返すようで申し訳ないが、**本当に秋姉妹は不人気なのだろうか。**

不人気の根拠としてはつきり言われているのは、私が知りうる限り東方シリーズ人気投票だけだ。四十九位と五十位。確かにこの結果は絶対である。しかし、その一面だけを以て秋姉妹を不人気とするのは、あまりにも横暴ではないだろうか。

まず、本投票は**回を重ねる毎に投票する対象数が増えている事実**を忘れてはならない。紅魔郷以降の本編ボスと、秘封と書籍組、旧作から魅魔・神綺・夢見を合わせた(以下主要キャラ)数は、第三回の時点で36名、第四回45名、第五回57名、第七回67名と、約10名ずつ増加している。

その一方で、東方界限の拡大に伴い投票に参加する人の数も増えてきた。それをまとめたのが上のグラフ(図1)である。

このグラフを見ても判る通り、総投票数はキャラ増加速度を遙かに上回る勢いで伸びている。古参キャラ達は増え続けるライバルと鏖迫り合いをしながら、かつ自分の票を伸ばさなければ同じ順位を維持する事すら出来ないのである。

となると、前回より順位を伸ばした秋姉妹ってむしろ結構頑張ったんじゃないのか？

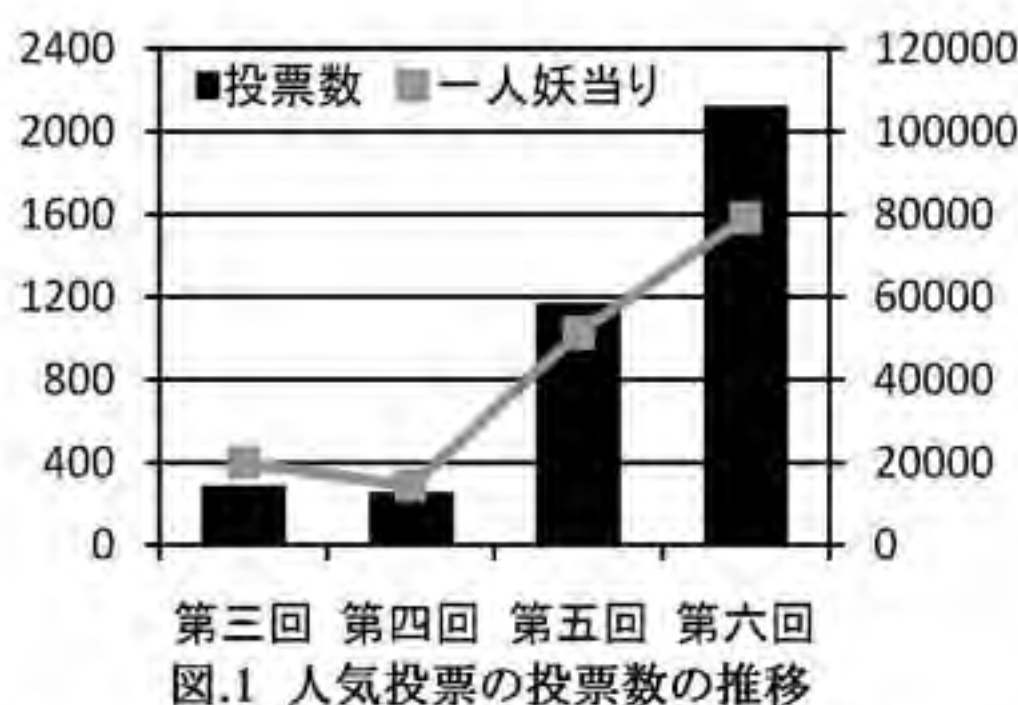


図1 人気投票の投票数の推移

私はお姉ちゃんの事が
好きなのにどーして
お姉ちゃんはいつも
□うるさいかなあ…

ははは……
心配してるんだよ

そうだといいいけどね
私なんかお姉ちゃんが
□うるさいからいつも
喧嘩しちゃうし…

お姉ちゃんは私の事
嫌いなんじゃないかなあ

そうでもないと
思うよ？

と、言いますよ？

えっと、この間の話
なんだけど……

秋に関する日本の民謡および童謡

中雑魚酒菜

今回の企画は、秋姉妹にとどまらず秋全般について総合的に研究しようという試みを（以下略。何回目やねん。）と言うわけで、日本の童謡、民謡の中で秋に関する物をざっと挙げてみることにする。また、各曲の作られた経緯や、歌詞についても少しばかり触れておく。

・「小さい秋見つけた」 一九五五年 作詞・サトウハチロー 作曲・中田喜直
筆者は秋と言えば真っ先にこの曲を思い浮かべる。この曲は、昭和三〇年、NHKの放送記念祭「秋の祭典」で、女声独唱付き合唱曲として放送するために作られた曲だ。作詞のサトウハチローは、「原稿用紙を前に布団に腹這いになって外を見ていたら、赤くなったハゼの葉を見て言い知れぬ秋を感じて、この歌を書き上げた。」と語ったそう。

・「まっかな秋」 一九六五年 作詞・薩摩忠 作曲・小林秀雄
こちらも有名な曲だと思うが、昭和四〇年、NHK「みんなの歌」で発表された曲だ。なお、この本が発行された二〇〇九年現在、著作権は切れていない。

・「夕焼け小焼け」 一九一九年 作詞・中村雨紅 作曲・草川信

・「赤とんぼ」 一九二七年 作詞・三木露風 作曲・山田耕筰

三木は故郷で過ごした子供の頃の郷愁から作詞し、大正十年に童謡集「眞珠島」に発表された。その後、昭和二年に山田が曲をつけた。日本の歌百選。

・「どんぐりころころ」 一九二二年 作詞・青木存義 作曲・梁田貞
大正一〇年に刊行された「かはいいい唱歌（共益商社書店）」が初出。水戸黄門のテーマにぴったり合うのは、トリビアで知っている人も多いだろう。

・「紅葉」 尋常小学読本唱歌（二） 作詞・高野辰之 作曲・岡野貞一

・「村祭」 尋常小学読本唱歌（三） 作者不詳

・「蟲のこゑ」 尋常小学読本唱歌（三） 作者不詳

・「秋の山」 尋常小学読本唱歌（五） 作者不詳

・「秋」 尋常小学読本唱歌（六） 作者不詳

一九一一年に文部省より発行された「尋常小学読本唱歌」より五曲。当時文部省は作詞者、作曲者に高額な報酬を払い、名は一切出さず、また作者本人も口外しないという契約を交わしたため、作者不詳の曲が多い。

また、「村祭」は市町村合併で村が消えるので時代にふさわしくないと言うとんでもない理由で一時教科書から姿を消したものの、現在では古き良き風習が見直され、小学三年生の教科書に収録されている。

・「秋の子」 一九五四年 作詞・サトウハチロー 作曲・末広恭雄

・「秋の野 歌曲集『六つの子供の歌』より」

一九四五年 作詞・北原白秋 作曲・團伊玖磨

・「里の秋」 作詞・斎藤信夫 作曲・海沼實

「里の秋」の原型となる「星月夜」という詩を斎藤が書き上げたのは昭和一六年、日本はアメリカとの激戦へと傾いていく。やがて日本は敗戦をし、教師を辞めた斎藤の元へと一つの電報が届く。

スグオイデコフ、カイヌマ

カイヌマといえば、あの作曲家の海沼實のことだろうか。とにかく東京まで行ってみると、そこには手に古い雑誌を持った海沼の姿が。その雑誌のページに載っていたのは彼が昭和一六年に発表した「星月夜」だった。海沼は言う。

約一週間後に神奈川県浦賀港に南方からの復員兵を乗せた船がやってくる。EZは、今後も続々と入港し復員してくる兵隊さん達を歓迎する番組を放送することになり、その時に流す歌を海沼に依頼した。そして適当な詩はないかと

一秋年

いっしゅうねん

清涼飲料水



ふむ、そろそろ
秋も終わりが

ストーブを出
たのもー

お初にお目に
かかります

私達は
秋の神よー！

次の新作の
新キャラかい？

僕まだ
やってないん
だけど

風神録から
いたわよう





Minoriko...

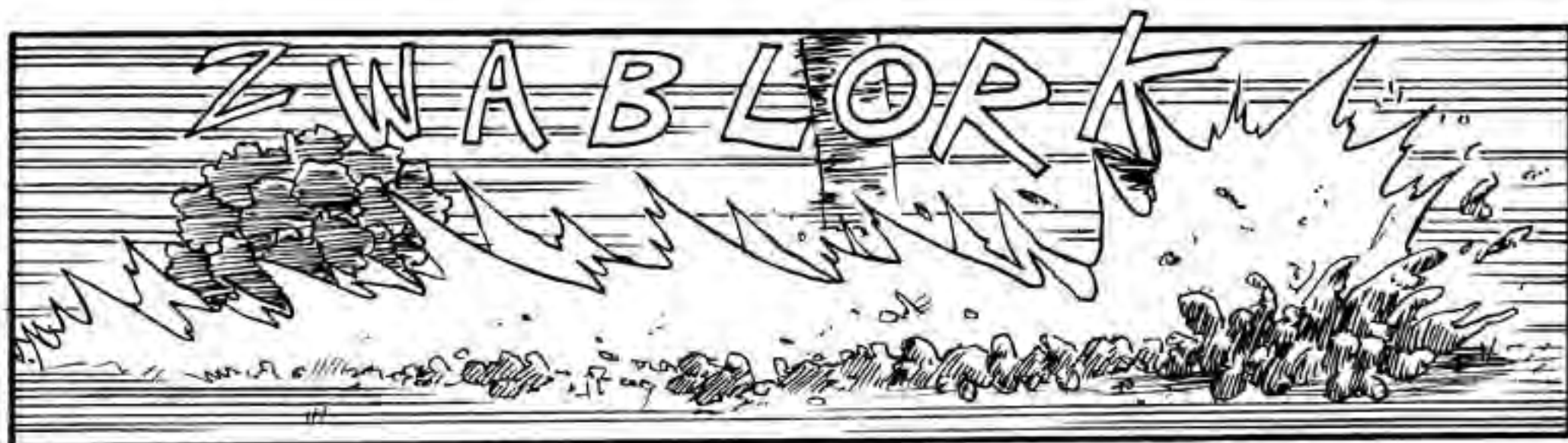
Do you think
I can come with
you to the
village this year?

...

I'd be
glad to have
you along,
once-san.







PURE AND HONEST
SHAMEIMARU, AT
YOUR SERVICE!

TA-DAH

IT'S THAT TIME ALREADY,
ISN'T IT? AUTUMN IS
SUCH A NICE SEASON!
WELL, I'VE COME TO--

I KNOW.
YOU COME
EVERY
YEAR.

REPRESENTING
THE BLABBER-
MOUTH NEWS!
REAL JOUR-
NALISM, FAIR
AND BALANCED!

HERE'S A SAMPLE
FOR YOUR REVIEW.

IT'S VERY
APPRECIATED!

AAH... THIS IS QUITE
DELICIOUS!

WOULD
YOU LIKE
ANOTHER?

OH, I'D LOVE
TO! BUT I
NEVER
DRINK AT
WORK, YOU
KNOW!

THANK
YOU.

ISN'T
THAT
WHY
YOU'RE
HERE?







何かしらね？

里の人間…
だね？



はっ

ん

はっ
ん

秋々する ぼどに。

春夏秋冬

顔がぬるるな。

